

第1回人権賞 受賞者 幼い難民を考える会

【受賞理由】

タイのカオイダン難民キャンプにおける保育園の建設、保育者の養成など、子どもの難民への支援、教育活動に対して。

Q 1 どのようなきっかけから「受賞テーマ」に取り組むようになりましたか。

1979年、タイに逃れた数十万のカンボジア難民への支援をきっかけに、「幼い難民を考える会」を設立。戦争は弱いものを際限なく痛めつけ、平和な未来を担うべき子どもたちが争いに巻き込まれて苦しみ、生きる権利を脅かされていた。難民キャンプにあっても、おとなの付属物ではない、幼い難民の一人ひとりが、少しでも人間らしい環境と必要な配慮のもとで暮らせるよう自立を手助けするために、国境を越えた活動を開始した。

Q 2 その活動には、どのようなご苦労がありましたか。

難民キャンプにあって、幼い子どもたちの保育を考え、子どもを心の傷から守るという視点は、物資の援助だけに止まらず、将来の人材を育てようという発想からだった。治安の悪い地域に、主に若い女性を派遣し続け、現地の人々の考えや伝統・文化などを尊重しながら、私たちは陰から支える、立場をわきまえた姿勢を貫いてきた。こうした活動を持続させるのは難しく、人材や資金難にいつも悩みながら、多くの支援者に支えられ歩んできたといえる。

Q 3 人権賞を受賞してどのような変化がありましたか。

難民キャンプで保育園運営、保育者養護を行い、幼い難民のための支援、教育活動に取り組んできたことが、基本的人権の侵害に対する救済活動、国際的な人権擁護活動として評価された。このことは、活動の深い意義を改めて自覚する契機となった。

Q 4 「受賞テーマ」はどのように発展・継承され、現在はどのような活動状況となっていますか。

1983年に難民キャンプが閉鎖され、13年の活動を終えた後は、タイ国境の被災村とカンボジアの村で、同様に厳しい境遇におかれた子どもたちの健全な成長を手助けする活動を続けてきた。2000年にはタイでの活動を村の人々に引き継ぎ、現在は、カンボジアで保育園運営、保護者養成、保健衛生指導、女性のための織物技術指導などを続けながら、人々が再び難民にならない、平和な社会の実現をめざしている。

Q 5 あなたにとって、いま最も関心のある「テーマ」は何ですか。

難民問題に遭遇した地域で、子どもたちが安全で安心できる環境を現地の人々とつくりながら、相手の自立を侵したり管理する態勢に陥らないようにする難しさを知り、また、私たちの国際社会での役割について多くを学んでき

た。活動が、難民救済を経て小規模の地域開発を手掛けるまでになり、人々の自助努力を支えるにはどうすればよいか、お互いを理解しあい、よりよい暮らしを目指すためには何をすべきかを常に考え、歩み続けていきたい。

Q 6 新たに掘くべき「人権」のテーマなど、今後の抱負や活動目標とともに聞かせください。

本会の名称が、「難民の子ども」ではなく、「幼い難民」であるのは、一人ひとりの独立した人格を大切にし、どのような境遇にあっても人間として生きる権利を尊重したいという願いからである。将来もこの基本姿勢に根ざし、子どもたちの成長を見守りながら、自立を支援する活動を発展させていく。難民キャンプ閉鎖後、私たちは、「幼い難民」を難民条約が定める難民に限らず、「帰属するところを持たず、保護されていない子ども」と幅広く解釈しながら事業を運営している。今後は、遠い日本にあって国際的な人権擁護活動に関心を持ち、共に考え支援しようとする多くの人々に、現地の実情をより分かりやすく伝え、何が求められ、何ができるのかを話し合いながら、新たな支援に結びつけていく。特に、未来を切り開く日本の子どもたちが、同時代を生きる仲間の様々な境遇に関心を抱き、行動できるよう働きかけ、私たちが学んだ経験を生かせるよう力を注いでいきたい。